

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	凌濛初編『合評選詩』考（二）
Author(s)	川島, 優子
Citation	中國中世文學研究 , 76 : 178 - 198
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054533
Right	
Relation	



凌濛初編『合評選詩』考(二)

川島優子

はじめに

明末には『文選』の評点本が複数刊行されている¹⁾。そのうち、凌濛初(一五八〇～一六四四)によって編纂された『合評選詩』は、『文選』の「補亡」から「雜擬」までの全詩を収め、そこに古今の注や評を集め付したものであり、題下評、眉批、傍批、総評、圈点と、とりわけ評の形式が多彩である。

前稿(「凌濛初編『合評選詩』考(一)」「附」『合評選詩』序文・凡例・付録翻字稿)、『中国中世文学研究』第七十四号、二〇二二)で整理をしたように、二「拍」(「初刻」拍案驚奇)、『二刻拍案驚奇』の編者としても知られる凌濛初は、烏程の名家に生まれ、五十を超える作品の著述、編纂、出版に携わっている。凌家は、父の凌迪知、叔父の凌稚隆、従兄弟の凌森美や凌瀛初、甥の凌瑞森、息子の凌琛等、一族で出版活動を行っており、とりわけ多色刷りの套印本を手がけていたことで知られる。『合評選詩』も朱墨刷りの套印本であり、現存する他の『文選』の評点本に比べると、その美しさや読みやすさは群を抜

いている。ほぼ同じ体裁で作られた続編ともいうべき『選賦』(凌森美輯刻)、『文選後集』(関于忱輯刻)が刊行されていることから、本書が好評を博したことも窺える。

『合評選詩』は全七巻から成り、第一巻は、(一)「輯諸名家合評選詩序」、(二)「凡例」、(三)「批評選詩名公姓氏」、(四)「詩人世次爵里」、(五)「選詩目錄(第一巻)」、(六)「選詩(巻一)」、(七)「選詩(巻二)」訂註」で構成される(番号は筆者による)。第二巻以下、(五)目錄、(六)選詩、(七)訂註、と続く。前稿では、(一)序文、(二)凡例、ならびに第一巻巻頭に置かれる(三)(四)、および各巻末に置かれる(七)について検討を加えた。その結果、読者の便宜を図って付録を充実させた点が本書の売りのひとつとなっており、(四)「詩人世次爵里」や(七)「訂註」は、李善注や五臣注、あるいは史書のダイジェスト版として、『文選』に関する知識を簡便に得るのに適した仕様になっていることが確認できた。

本稿では、『合評選詩』に収められる評について具体的な考察を加え、本書を明代の『文選』評点本の中に位置づけるとともに、凌濛初の編纂態度についても考えてみ

たい。

一 評者と批評について

『合評選詩』は、凡例第七条に、「圈點諸家無本、止郭明龍有批評文選本。今悉依其筆（圈點諸家に本無く、止郭明龍のみ批評文選本有り。今悉く其の筆に依る）」とあるように、万暦十一年の進士郭正域（一五五四―一六一二）の評点に基づいており、評語だけでなく、圈点についても郭正域に拠ったとしている。

郭正域の評点本については、『合評選詩』序文に「邇來、郭太史明龍所操觚、高視濶歩（邇來、郭太史明龍の操觚する所は、高視闊歩たり）」とあるように、当時高く評価されていたものと思われる。『合評選詩』の統編ともいえるべき『選賦』（凌森美輯刻）の識語にも、「江夏郭明龍先生削以丹鉛、加之品驚、甕牖繩樞之子亦得側辯而哦矣（江夏の郭明龍先生 削るに丹鉛を以てし、之に品驚を加ふるに、甕牖繩樞の子も亦た側弁するを得て哦ふなり）」とあり、郭正域の評点本が広く受容されていたことが窺える。

現存する『新編文選批評』は²²、封面に「明龍郭先生批評 文選考註 壬寅春博古堂刊」とあるように、郭正域の批評が付けられた『文選』であり、前集十四卷、後集十二卷に分かれる。『合評選詩』が収録する詩部については、巻九―巻十三が相当する。『新刊文選批評』の評点と比較した結果、『合評選詩』は評語、圈点のいずれも、原則としてほぼ忠実にその評点を採用していることが確

認できた²³。なお、『新刊文選批評』には巻首に「文選序」「文選姓氏」「音釈」が付されているが、『合評選詩』はそれらについては採用せず、また『新刊文選批評』では各作品に「考注」（六臣注の抜粋）が付けられているが、『合評選詩』各巻末に付けられる「訂註」とは一部しか一致しない。凌濛初が用いた郭正域の批評本が現存するこの『新編文選批評』なのかどうかは定かでないが、『合評選詩』はあくまで郭正域の評点のみを採用したようである。

『合評選詩』は、この郭正域の評点に基づき、さらに四十名ほどの評語を合わせ付したものである。本書付録の（三）「批評選詩名公姓氏」には、六朝の沈約から明の譚元春まで、本書に評が採用された三十九人の名が挙げられる²⁴。これらの人物の評の出処と思われる書物について、代表的なものは趙俊玲『《文選》評点研究』（上海古籍出版社、二〇一三）に指摘されているが、評者毎の分量の偏りなどについては不明である。また、実際にはこの三十九名以外の人物名（あるいは書名）も見られる。そこで、郭正域の評点を除き、『合評選詩』に収録される全ての評について、『附表』に整理をした。

本書に収められる評については、引用される回数および長短にかなりの差がある。郭正域を除いて最も引用回数が多いのが、鍾惺と譚元春の評であり、次いで王世貞や楊慎のものも三十条以上が確認できる。一方で、同じく評者として名が連ねられるものの、謝靈運、李白、元

稹、蘇軾などは、わずか一条しか引用されていない。

凌濛初はどのようにして過去の膨大な書物の中から評を集めたのだろうか。【附表】を見ると、同じ人物の評は基本的に同じ書物から引かれていることがわかる。また『詩人玉屑』や『苕溪漁隱叢話』といった詩話集を利用したと思われる例も見られること等から、凌濛初はある程度の目星を付け、また先行する書物をうまく利用して、効率よく「合評」をしたものと思われる。

明代には『合評選詩』に先行して様々な『文選』関連書籍が刊行されており²⁵、凌濛初はそれらも参考にしてきたようである。たとえば【附表】「その他」に見られるように、『合評選詩』には「張鳳翼」「虞九章」の言も引用されている。本書に先立ち、万暦八年には張鳳翼編『文選纂注』が、万暦二十八年には虞九章注『文選詩集』が刊行されており、特に『文選纂注』については評点が増えられたテキストがその後複数刊行されるなど（万暦十年余碧泉輯刻『文選纂注』評本、万暦二十四年余碧泉輯刻『文選纂注評苑』、万暦二十九年惲紹龍輯刻『文選纂注評林』、相当な需要があったものと思われる。

以下、虞九章訂註『文選詩集』、および張鳳翼編『文選纂注』について、『合評選詩』との関係を確認しておきたい。

二 『文選詩集』、『文選纂注』との関係

『文選詩集』は、『合評選詩』と同じく『文選』の「補

亡」から「雜擬」までの全詩を収め、「明虎林虞九章」が訂註を加えたもので、世徳堂貞予の刊行。上欄に詩語の典拠を示し、行間に傍注を付す²⁶。巻首に置かれる「詩人世次爵里」は、『合評選詩』第一巻に置かれる（四）「詩人世次爵里」とほぼ一致する²⁷。前稿において、『合評選詩』の「詩人世次爵里」が、他の評点本に見られる詩人紹介とは異なり、李善注の節略ではないことを指摘した上で、『合評選詩』の「詩人世次爵里」に基づくところがあるのか、あるいは凌濛初が史書の記述を直接節略したのか、現段階では不明である²⁸としたが、『合評選詩』の「詩人世次爵里」はおそらく『文選詩集』のそれをほぼ完全に利用したものであろう。両書の「凡例」についても共通する文言が見られるなど²⁹、凌濛初が『文選詩集』を参考にして、『合評選詩』を編纂した可能性は極めて高い。

一方、万暦八年の序を持つ『文選纂注』は、戯曲「紅拂記」の作者でもある張鳳翼の編³⁰。割り注の形で六臣注を抜粋したものが付けられており、出典は基本的に示されない。この『文選纂注』については、後に評点を加えたものが数種刊行されている。たとえば万暦十年余碧泉輯刻『文選纂注』評本（以下、「余本」とする）は、張鳳翼編『文選纂注』の上欄に、王守仁、李夢陽、何景明、李攀龍、王世貞、唐順之、王慎中、楊慎、劉辰翁、何孟春、王維禎、吳国倫、汪道昆らの評語を加えたもので、圈点や傍注、傍批は見られない。

『合評選詩』には王世貞の評が三十条余り見られるが、王世貞評はこの余本にも多く引かれる。上述した『文選詩集』の利用を考えれば、あるいは凌濛初は、余本（あるいはその他の『文選纂注』評点本）に引かれる王世貞の評を再利用した可能性もある。しかし両書所引の王世貞の評語を確認したところ、同一のものは見られなかった。

趙俊玲氏（前掲書）は、余本所引の評の多くは来源が不確かであり、下級文人たちによる評を集めて名だたる文人の名を被せたものであろうと指摘する。凌濛初は、この余本（あるいはその他の『文選纂注』の評点本）とは意識的に差別化を図り、評を選択しているように思える。趙氏に拠れば、万曆二十八年鄭維岳增補・李光縉評釈『鼎雕增補單篇評釈昭明文選』と『合評選詩』についても評の来源はかなり一致しているものの、やはり引かれている評は異なっているという。

以上、『合評選詩』は、『文選詩集』については付録の「詩人世次爵里」をほぼそのまま用いているのみならず、凡例や書式についても似通った部分が多いこと、一方で『文選纂注』については張鳳翼の言こそ引用しているものの、後続する『文選纂注』の評点本とは評が重ならないことを確認した。笠見弥生氏は「凌濛初と評点」〔東京大学中国語中国文学研究室紀要〕第二十一号、二〇一八）において、凌濛初が「市場に出回る他の評点本や注釈の類に広く目を通し、本文、評点の双方に気を配って、

よりよい書物を作ろうとしていた」ことを指摘するが、こうした凌濛初の姿勢は『合評選詩』においても窺える。凌濛初は、先行する書物を効率よく利用しつつも、（特に評点については）それらとの差別化を図って『合評選詩』を編んだと考えられるのである。

三 『合評選詩』の評語について

では実際に『合評選詩』にはどのような評が収められているのか、いくつかの例を取り上げて具体的にみてみたい。

(1) 作品や作者に関するもの

『合評選詩』巻一（二十五葉）に収められる潘岳「金谷集作詩」には、上欄に次のような郭正域の評が置かれている（以下、発言主が示されないものは郭正域の批評）。

詞爛響促、遂爲詩識。（詞爛らかにして響促り、遂に詩識と爲る。）

ここでいう「詩識」が何を指すのか、続けて世説の記事が引かれる。

世説曰、孫秀収石崇、同日収岳、石先送市、亦不相知。潘後至、石謂潘曰、安仁卿亦復爾邪。潘曰、可謂白首同所歸。岳金谷集詩乃成其識。

世説曰はく、孫秀 石崇を収め、日を同じくして岳を収む。石 先づ市に送られ、亦た相ひ知らず。潘 後れて至るに、石 潘に謂ひて曰はく、「安仁、卿も亦た復た爾るか」と。潘 曰はく、「白首まで帰する所を同じくせん」と謂ふべし」と。岳が金谷集詩乃ち其の識を成せり、と。

『世説新語』（「仇隙」）には、潘岳の「金谷集作詩」の末句「白首同所歸」が、石崇と潘岳が同日に処刑される未来を予言する結果となった話が載せられる。この『世説新語』の記事は李善注に見られるもので、郭正域批評『新刊文選批評』の考注にも収められている。『合評選詩』は「金谷集作詩」を理解する上での基本的な知識として、また先に挙げた郭正域の評語を理解するための補足として、本記事を載せたものと思われる。

また『合評選詩』巻三の劉楨「贈從弟三首」（十九葉）には、葛立方『韻語陽秋』巻十二の次の文が引かれる。

葛立方曰、建安七子、惟劉公幹獨爲諸王子所親。曹操熾焰蓋世、甄夫人出拜、緒人皆伏、而公幹獨平視、曹雖輪作而不悔、亦可嘉矣。「公幹贈從弟詩」云「亭亭山上松」等語、其寄意如是、豈肯少屈於操哉。末篇又托興鳳凰、有「何時當來儀、將須聖明君」、則不以聖明待操矣。

葛立方曰はく、建安七子、惟だ劉公幹のみ独り諸王

子の所親たり。曹操の威焰 世を蓋ひ、甄夫人出で拜するに、緒人皆 伏すも、公幹のみ独り平視し、輪作せらると雖も悔いず、亦た嘉しむべし。「公幹贈從弟詩」に云ふ「亭亭山上松」等の語、其の寄する意は是の如くして、豈に肯へて少しく操に屈せんや。末篇に又興を鳳凰に托し、「何時當來儀、將須聖明君」と有るは、則ち聖明を以て操を待たざるなり、と。

ここでは、劉楨が曹丕の甄夫人を直視したために曹操によつて不敬罪に問われたこと、しかし曹操に屈したわけではないことが本詩から窺えるという、葛立方の解説が加えられている。

こうした作品の理解に必要な知識のみならず、作者（詩人）についての情報も提供される。それが最もよく見られるのが、第一巻に置かれる（四）「詩人世次爵里」である。「詩人世次爵里」は、戦国から漢→梁と、時代ごとに『文選』詩人が紹介されたもので、先述したように『文選詩集』の「詩人世次爵里」を利用したものと考えられるが、単に『文選詩集』のそれを再利用しただけではなく、そこに鍾嶸（『詩品』）や劉勰（『文心雕龍』）らの言を加えた点が『合評選詩』の工夫である。

たとえば、「陳思王植」（三葉ウラ）について、「詩人世次爵里」本文は以下の通りである。

陳思王植

字子建、魏文同母弟也。封平原侯、尋徙臨菑。文帝即位、命諸侯皆就國。黃初二年、貶安鄉侯。明帝太和元年、徙東阿。六年、加封陳王、薨。年四十一、諡曰思。

字は子建、魏文の同母弟なり。平原侯に封ぜられ、尋いで臨菑に徙さる。文帝即位するに、諸侯に命じて皆國に就かしむ。黃初二年、安郷侯に貶とさる。明帝太和元年、東阿に徙さる。六年、陳王を加封せられ、薨る。年四十一、諡して思と曰ふ。

上欄には、鍾嶸(『詩品』上)および敖陶孫(『臞翁詩評』)の評が引かれる。

鍾嶸曰、其源出於國風。骨氣奇高、詞采華茂。情兼雅怨、體備文質、粲然溢古、卓爾不群。

鍾嶸曰はく、其の源は國風より出づ。骨氣は奇高にして、詞采は華茂なり。情は雅怨を兼ね、体は文質を備へ、粲然として古に溢れ、卓爾として不群なり、と。

敖陶孫曰、子建如三河少年、風流自賞。

敖陶孫曰はく、子建は三河の少年の、風流自ら賞するが如し、と。

始まらざるなり。二陸諸君之が備を為すなり。此の詩の如きは凡そ十六韻にして始めて太子に入る。後詩は凡そ八韻にして始めて晋乱れ、齊王岡始めて之を平らぐるに入る。又士衡の「贈斥丘令」「答賈常侍」、潘安の「為賈答應吉甫華林園宴集」も皆然り。若し爾らば則ち必ずしも多く此等の語を費やして、但だ一冒頭を成さざるに、百凡の宴会の酬贈、挙げて以て之を貫くべし。韋孟の「諷諫」、思王之「責躬應詔」、靖節の「贈族」、叔夜の「幽憤」、仲宣の「贈蔡陸文始」、越石の「贈盧諶」の若きは、寧くんぞ是れ有らんや、と。

ここでは、四言詩に冒頭(まくら)が置かれるのは二陸に始まるとして¹⁰⁾、本詩および次の陸雲「大將軍宴會被命作詩」の構成について解説がなされ、同様の構成を持つものとして、陸機の「贈馮文麗遷斥丘令」「答賈長淵」、潘岳「為賈謐作贈陸機」、庾貞「晋武帝華林園集詩」が挙げられる。王世貞の評はいずれも『藝苑卮言』からの引用であるが、『藝苑卮言』については弟である王世懋が「自鍾嶸『詩品』以來、譚藝者亡慮數百十家、前則嚴滄浪、徐迪功二錄、近則余兄『藝苑卮言』再稱篤論(鍾嶸の『詩品』より以來、藝を譚ずる者は亡慮(無慮)數百十家、前には則ち嚴滄浪、徐迪功の二錄あり、近きは則ち余兄の『藝苑卮言』最も篤論と称せらる)」(『王奉常集』卷八)というように、当時の文壇において高く評価されて

ここでは、曹植の詩風に対する『詩品』の評価、並びに敖陶孫の評が上欄に加えられ、曹植の略伝とあわせて後世の曹植評価についても一目でわかるようになっていられることにより、作品や詩人に対する様々な情報が増えることにより、読者は他書をひもとくことなく、『合評選詩』を読むだけで『文選』に関する基本的な知識が得られるようになっているのである。

(2) 文学史的な知識に関するもの

『合評選詩』の評には、個々の作品の理解を助けるだけでなく、作品あるいは作者が文学史的にどう位置づけられるのかといった、より幅広い知識を提供するものも少なくない。たとえば巻一の陸機「皇太子宴玄圃宣獻堂有令賦詩」(十五葉ウラ)には、上欄に次のような王世貞(『藝苑卮言』卷三)の文が引用される。

王世貞曰、古詩四言之有冒頭、蓋不始延年也。二陸諸君爲之備也。如此詩凡十六韻而始入太子。後詩凡八韻而始入晉亂、齊王岡始平之。又士衡「贈斥丘令」「答賈常侍」、潘安「為賈答應吉甫華林園宴集」皆然。若爾則不必多費此等語、但成一冒頭、百凡宴會酬贈、可舉以貫之矣。若韋孟之「諷諫」、思王之「責躬應詔」、靖節之「贈族」、叔夜の「幽憤」、仲宣之「贈蔡陸文始」、越石之「贈盧諶」、寧有是耶。

王世貞曰はく、古詩四言の冒頭有るは、蓋し延年に

いた。読者は『藝苑卮言』をひもとくことなく王世貞の解説を併せ読むことができ、本詩(あるいは陸機)の文学史的な位置づけを知ることができるのである。

『合評選詩』には『文選』所収の詩が後世に与えた影響に関する指摘も散見される。たとえば、巻一の謝瞻「王撫軍庾西陽集別」(二十五葉ウラ)には、楊慎(『丹鉛總錄』卷二十、『升庵詩話』卷五)の以下の評が挙げられる。

楊慎曰、「離會雖相雜」、杜子美「忽漫相逢是別筵」之句、實祖之。顏延年「春江壯風濤」、杜子美「春江不可渡、二月已風濤」之句實衍之。故子美論兒詩曰「熱精文選理」。

楊慎曰はく、「離會雖相雜」、杜子美「忽漫相逢是別筵」の句、実に之を祖とす。顏延年「春江壯風濤」、杜子美「春江不可渡、二月已風濤」の句も実に之を衍す。故に子美兒に論ずる詩に曰はく「熱精せよ文選の理」と、と。

『文選』を熟知していた杜甫が息子に「熱精文選理」(宗武生日)と求めたことについては、『合評選詩』序文でも言及されていたが¹¹⁾、(1)では、第十五句の「離會雖相雜」を杜甫が踏まえていること(「送路六侍御入朝」、さらに杜甫は顏延年詩も踏まえていること(「渡江」)が、楊慎によって具体的に示されている。

同じく巻二左思「詠史詩八首」其一(二葉)には、葛

立方『韻語陽秋』卷二)の評が引かれる。

葛立方曰、杜詩「譚笑無河北」、蓋用太冲「長嘯激清風、志若無東吳」也。王維云「虜騎千重只似無」則拙矣。

葛立方曰はく、杜詩「譚笑無河北」は、蓋し太冲の「長嘯激清風、志若無東吳」を用ゐるなり。王維が「虜騎千重只似無」と云ふは則ち拙きなり。

ここでも、杜詩(「觀安西兵過赴關中待命二首」其二)に見られる「談笑無河北」の句が、左思「詠史詩」第一首の第九、十句「長嘯激清風、志若無東吳」に基づくものであることが指摘されるとともに、王維の「虜騎千重只似無」(「少年行四首」其三)も本詩に基づくものの、杜詩に比べると劣っているという葛立方の見解が示される。このように、『合評選詩』には、『文選』が後世(特に唐詩、中でも杜詩)に与えた影響についての指摘も目立つ。

以上(1)(2)のような例からは、『合評選詩』が、『文選』に関する基礎的な知識を得ると同時に、後世の文人たちによる評価や指摘も要領よく知りうる形になっていることがわかる。逆にいえば、『合評選詩』はこうした情報を必要とする読者を想定して作られたものだということになる。

明代に多く編まれた『文選』の評点本は、『文選』の入門書、あるいは科挙受験者のための参考書的なものである。

影響豈不懷、自遠每相匹。
婉彼幽閑女、作嬪君子室。
峻節貫秋霜、明艷侔朝日。
嘉運既我從、欣願自此畢。

ここでは、秋胡子とその妻との結婚が語られる。上欄には郭正域の「一節一節遂出情款、接上起下、信是妙手(一節一節遂に情款を出し、上を接ぎて下を起こす、信に是れ妙手なり)」という評があり、秋胡詩全体の流れるような構成に高い評価が加えられている¹¹²⁾。特に第九、十句には圈が施され、「有地歩(地歩有り)」という郭評が付される。また第七句の「峻節」については、「鍾惺曰、峻節二語雖不佳、已伏盡全詩之案(鍾惺曰はく、「峻節」の二語は佳からざると雖も、已に全詩の案を伏せ尽くす)」として、作品全体の構成と語の用い方についての鍾惺の評が置かれる。

燕居未及好、良人顧有違。
脫巾千里外、結綬登王畿。
戒徒在昧旦、左右來相依。
驅車出郊郭、行路正威遲。
存爲久離別、沒爲長不歸。

ここでは、結婚早々に夫が公務で旅立つこととなる。第九、十句に圈が付けられるものの、評語は見られない。

つたという指摘がある¹¹²⁾。先述した『文選纂注』の評点本などはたしかに初学者向けの学習書として位置づけられるように思われる。また、そもそも套印本というスタイル自体が、初学者の学習に適した仕様であったことも指摘されている¹¹³⁾。

しかし『合評選詩』について言えば、初学者が知識を身につけるためのものとはやや性質の異なる評も多く収録されている。それが、詩の鑑賞、評価に関わるものである。

(3) 作品の鑑賞、評価に関わるもの

『合評選詩』には郭正域による圈点(点)が施されており、他の評点本の多くと同様に、圈は「とてもよい」、点は「よい」、そして抹(傍線)については「悪い」という評価を示しているものと考えられる。上述したように『合評選詩』の凡例(第七条)には、圈点を有する『文選』の評点本が郭正域の批評本のみであったこと、だからこそ郭正域の批評本を底本としたのだということが述べられており、凌濛初が圈点、つまり作品の鑑賞ともいべき側面にも重きを置いていたことが窺える。

以下、とりわけ多くの評点が付される巻二の顔延之「秋胡詩」(六葉ウラ)を取り上げてみたい(以下、詩の書き下しは省略する)。

椅梧傾高鳳、寒谷待鳴律。

嗟余怨行役、三陟窮晨暮。
嚴駕越風寒、解鞍犯霜露。
原隰多悲涼、迴颺卷高樹。
離獸起荒蹊、驚鳥縱橫去。
悲哉游宦子、勞此山川路。

ここでは、夫の旅の辛さをうたう。上欄には「鍾惺曰、太白『妾夢越風波』、本此。然妙些(鍾惺曰はく、太白の『妾夢越風波』、此に本づく。然れども妙なること些かなり、と)として、李白詩への影響が指摘される。また「譚元春日、只是『勞人』二字却用得妙(譚元春日はく、只だ是れ『勞人』の二字なれば却て用ゐること妙たるを得、と)」として、第十句「勞此」についての指摘が見られる。

超遙行人遠、宛轉年運徂。
良時爲此別、日月方向除。
孰知寒暑積、僂俛見榮枯。
歲暮臨空房、涼風起座隅。
寢興日已寒、白露生庭蕪。

ここでは、長い間夫を待ち続ける妻の様子がうたわれる。上欄には「鍾惺曰、『寢興日已寒』五字感深(鍾惺曰はく、『寢興日已寒』の五字は感ずること深し、と)」として、独り寝を重ねる妻の描写に評が付される。

勤役從歸願、反路遵山河。
昔辭秋未素、今也歲載華。
蠶月觀時暇、桑野多經過。
佳人從所務、窈窕援高柯。
傾城誰不顧、弭節停中阿。

ここでは、帰郷が叶った夫が戻る途中に、桑を積む美女に出会った様子がうたわれる。上欄には「譚元春日、此語真朴有味、子美常用此務字（譚元春日はく、此の語真朴にして味有り、子美常て此の務字を用ふ、と）」とあり、詩の評価とともに杜詩への影響にも触れられる。

年往誠思勞、路遠濶音形。
雖爲五載別、相與味平生。
捨車遵往路、鳧藻馳目成。
南金豈不重、聊自意所輕。
義心多苦調、密比金玉聲。

ここでは、五年におよぶ別離ゆえに妻を認識できなかった夫が、桑摘みの美女を誘惑して拒絶される様子がうたわれる。上欄には「（譚元春）又曰、着「相與」字、便不潦草（又曰はく、「相与」の字を着くるは、便ち潦草ならず、と）」、ならびに「（譚元春）又曰、『密』字下得渾、『金玉聲』三字便不膚淺（又曰はく、『密』字下すに渾

なるを得、『金玉声』三字 便ち膚淺ならず）」と、具体的な字句の用い方についての説明が加えられる。また、第九句「義心多苦調」の傍らには、「鍾惺曰、漢詩中深厚語（鍾惺曰はく、漢詩中の深厚の語なり、と）」および「（鍾惺）又曰、善下虚字、有趣有力（又曰はく、善く虚字を下すは、趣有り力有り、と）」という¹⁵⁾、やはり字句についての評価が見られ、本詩の見るべきポイントが示される。

高○節○難○久○淹○、
竭○來○空○復○辭○。
遲○遲○前○途○盡○、
依○依○造○門○基○。
上○堂○拜○嘉○慶○、
入○室○問○何○之○。
日○暮○行○采○歸○、
物○色○桑○榆○時○。
美○人○望○昏○至○、
慙○歎○前○相○持○。

ここでは、さきほどの美女が実は自身の妻であったことを知って恥じ入る夫の様子がうたわれる。上欄には、「楊慎曰、呂氏春秋『膠鬲見武王于鮪水曰、『西伯竭去。』注、『竭、何也。』則『竭』之爲言『盡』也。『竭來空復辭』、亦謂『盡來』、義始通。（楊慎曰はく、呂氏春秋『膠鬲は武王に鮪水に見えて曰はく、西伯 竭^なぞ去る』、注して、『竭、何なり』といふ。則ち『竭』の言爲るや「盡」なり。『竭來空復辭』は、亦た『盡來』と謂ひて、義始めて通ず、と）」として楊慎（『丹鉛總錄』卷二十一、『升庵詩話』卷十二）の言が引かれ、「竭」字の解説がなされ

る。

また、第六句「入室問何之」の傍らには、「鍾惺曰、温甚、情事詳婉、可想其叙手之暇（鍾惺曰はく、温なること甚しく、情事は詳婉にして、其の叙手の暇を想ふべし、と）」、第八句「物色桑榆時」の傍らには、「（鍾惺）又曰、此句妍而深、在『物色』二字（又曰はく、此の句の妍にして深きは、『物色』の二字に在り、と）」、さらに第九句「美人望昏至、慙歎前相持」の傍らには、「（鍾惺）又曰、『望昏』二字盡景、『慙歎』二字盡情（又曰はく、『望昏』の二字は景を尽くし、『慙歎』の二字は情を尽くす、と）」と、字句についての具体的な評価が示され、第七首末には「譚元春日、秋胡詩、只如此叙其事、化筆秀手（譚元春日はく、秋胡詩、只だ此の如く其の事を叙ぶるは、化筆秀手なり、と）」という高い評価が加えられる。とりわけ多くの評語が引用されており、全体に圏点が付されていることから、声をかけた美女が自身の妻であったという本章こそが、本詩のクライマックスであることが視覚的にも容易に窺える。

有懷誰能已、聊用申苦難。
離居殊年載、一別阻河關。
春來無時豫、秋至恆早寒。
明發動愁心、閨中起長歎。
慘悽歲方晏、日落遊子顏。

ここでは、別離の間における妻の胸の内がうたわれる。上欄には、第一句「有懷誰能已」に対して、「鍾惺曰、此語用作首句便深婉（鍾惺曰はく、此の語用ゐて首句を作すは便ち深婉なり、と）」と、語の用い方についての評価が加えられる。

高○張○生○絕○弦○、
聲○急○由○調○起○。
自○昔○枉○光○塵○、
結○言○固○終○始○。
如○何○久○爲○別○、
百○行○愆○諸○己○。
君○子○失○明○義○、
誰○與○偕○沒○齒○。
愧○彼○行○露○詩○、
甘○之○長○川○汜○。

ここでは、夫の行為に絶望した妻が川に身を投げるに至る心理がうたわれる。上欄には、冒頭の二句について「二句接得有大力、匠語亦奇（二句 接し得て大力有り、匠語も亦た奇なり）」という郭正域の評が置かれ、また、「鍾惺曰、板得有趣（鍾惺曰はく、板し得て趣有り、と）」、「（鍾惺）又曰、秋胡妻之死畢竟爲窺其夫之無情耳。昔人謂、其死于妬、論雖稍刻、實有至理（鍾惺）又曰はく、秋胡の妻の死は畢竟 其の夫の無情なるを窺ふ為なるのみ。昔人、其の死は妬に于いてすると謂ふは、論稍刻なると雖も、実に至理有り、と）」として、妻の死の理由に対する鍾惺の解釈を引く。

このように、秋胡詩は、後世への影響、字句の説明、従来の解釈に関する情報が提供されるだけでなく、用字

用語の妥当性や詩の構成の妙といった作り手側の視点から、郭正域、鍾惺、譚元春、楊慎らの解説が加えられているのである。まさに凌濛初が序文でいう「恍然如聆諸家之咳唾、而晤言一室（恍然として諸家の咳唾を聆きて、一室に晤言するが如し）」である。

もちろん、こうした良い評価だけではない。たとえば、巻一の丘遅「侍宴樂游苑送徐州応詔詩（二十二葉ウラ）を見ると、

詰旦閭闔開、馳道聞鳳吹。
輕黃承玉輦、細草藉龍騎。
風遲山尚響、雨息雲猶積。
巢空初鳥飛、荇亂新魚戲。
寔惟北門重、匪親孰爲寄。
參差別念舉、肅穆恩波被。
小臣信多幸、投生豈酬義。

第一、二句には圈点が付けられて上欄に「起好（起は好し）」という郭正域の評が置かれるが、第七句に対しては「巢空二語何謂（巢空の二語は何の謂か）」という評語が、また十一句以降はマイナスの評価を示す傍線が引かれ、第十二句「肅穆恩波被」に「於題意索然（題意に於いて索然たり）」、第十三、十四句「小臣信多幸、投生豈酬義」には「結醜（結は醜し）」という手厳しい傍批が付けられる。

うな『合評選詩』の批評、たとえば「起好」「結醜」、あるいは「不似詩」「令人欲淚」「妙」といった批評で詩が作れるようになるのか疑問である。潘岳の詩を読むのに「世説」の記事を必要とするような読者が、果たして『文選』に詩の手本を求めたのだろうか。『合評選詩』に見られるこうした評語には、むしろ白話小説のそれに似たものが感じられるように思われる¹⁶⁾。

明清の批評といえば、白話小説の存在も忘れることはできない。『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』といった長編白話小説も、一般的に流通したものは、李卓吾や金聖嘆、毛宗崗や張竹坡といった人物の批評を伴ったものであった。凌濛初が編纂した「二拍」（『拍案驚奇』『一刻拍案驚奇』）にも、凌濛初自身のものとされる批評が付けられている。こうした小説批評の中にも、作り手側の視点から作品の見所を指摘し、文章の善し悪しを論じるものが多く見られる。たとえば現存する『水滸伝』の中でも最も古い完本である容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』を見てみると、第三回、魯智深が肉屋に、刻んでもらったばかりのミンチを投げつける場面では、「却似下了一阵的肉雨（肉の雨が降ってきたかのようだ）」という箇所に圈点が付けられ、「好文章」という傍批とともに、上欄には「肉雨兩字、恁地形容、從來未經人道過（肉雨という二字、このような形容はこれまでにない）」という眉批が付けられている。逆に、第八回で日暮れの様子を韻文で描写した箇所には、「刪」の文字が、

こうした評点は『合評選詩』に限ったものではない。たとえば凌濛初の叔父に当たる凌稚隆によって万曆の初め頃に刊行された『史記評林』は、『合評選詩』と同様に、『史記』に関する古今の様々な評（倪思、劉辰翁、王忠麟、王九思、楊慎、王世貞等）を集め付したものであるが、そこにもやはり『史記』の読解に必要な基礎的な知識のほか、文章そのものに対する評が多く見られる。高津孝氏は「明代評点考」（『東方学論集（東方学会創立五十周年記念）』、東方学会、一九九七）において、『史記評林』の評語について、

……ここに引用した評点は、考証的な訓詁注釈、歴史事実そのものの政治的倫理的側面についてのコメントでは全くない。そうした評点が全くないという訳ではないが、評林本の明人のかなりの部分は文学批評に近いものである。明人にとって、『史記』は確立した事実の集積としての歴史書としてではなく、文章の手本としての意味、文学としての意味を強く持ち始めていたのである。

と、『史記』が単なる歴史書としてではなく、文章の手本として、あるいは文学として読まれていたことを指摘している。

そうであるならば、『文選』も、あるいは詩の手本として読まれたのではないかとも考えられるが、上に見たように、第十回で酔った林冲が雪の中で倒れる場面にも「可刪」の文字が見られる。読者がこうした白話小説に付けられた批評を参考に、文章の練習、ましてや受験勉強を行っていたとは考えがたく、白話小説は評点込みでひとつの作品、ひとつの「読み物」であったと考えるべきであろう。

本稿で見たように、『合評選詩』は、古今の著名人たちの解説が集められ、『文選』に関する知識が効率よく得られる作りになっていた。さらに圈点、傍批、眉批がちりばめられ、作品の見所がピンポイントで指摘される。しかもこうした鑑賞に関する評の多くは、郭正域や鍾惺、譚元春といった今をときめく文人によるものである¹⁷⁾。『合評選詩』は、解説なしには『文選』を理解するのが難しかった層を主たるターゲットにし、作品の鑑賞にも力を入れた、ある種の「便利で知的な読み物」ともいえるべき性質をもつものとして、俗文学にも通じた凌濛初という出版界のサラブレッドによって、戦略的に生み出されたひとつの『文選』の形だったと考えることができるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、『合評選詩』に収められる評語について、具体的な考察を加え、凌濛初の編纂態度の一端を明らかにすることを試みた。

明代には、『文選纂注』およびその評点本に代表される

『文選』関連書籍が多く刊行されており、『合評選詩』もそうした流れに位置づけられるが、先行する他の『文選』関連書籍が注（六臣注の節略）をメインに据え、評点が加えられたものについても評点はサブにすぎない位置づけであったのに対し^[18]、『合評選詩』は「訂註」を各巻末に置き、套印本のスタイルで本文と評点をあわせて読ませる工夫を施すなど、あくまで評点に重点を置いた。評点へのこだわりは、『合評選詩』という書名からいともより、第一巻の巻頭に（二二）「批評選詩名公姓氏」が置かれていることからも窺える。

実際に『合評選詩』の評を見ていくと、作品を理解するための基礎的な情報や文学史的な知識に関するものが一定数を占めることなどから、本書も他の評点本と同様に、高級文人を対象とした書物ではなかったことが推測できる。しかし一方で、本書は作品の鑑賞、評価に関わる批評も多く収録されており、本書が従来型の入門書（受験参考書）とは一線を画す書物であったことも窺える。凌濛初は、様々な性質の評をうまく「合評」することで、『文選』に関する知識を効率よく得ることができただけでなく、作品そのものを文学として鑑賞するのにも適した書物を作り上げたのではないかと考えられるのである。

『四庫全書総目提要』（集部四十六、総集類存目三「合評選詩」七卷）は本書について、「所採惟鍾、譚爲多、圈点則一依郭正域本。其宗旨可以概見也（採る所は惟だ鍾、譚のみ多きを為し、圏点は則ち一に郭正域本に依る。其

の宗旨は以て概見すべきなり）」とし、『合評選詩』が郭正域の評点に基づき、鍾惺、譚元春の言を多く引いていることを挙げて、凌濛初の「宗旨」が見てとれるとする。しかし一方で、本書には李東陽、徐楨卿、楊慎、何景明、何良俊、王世貞、王世懋、皇甫汸、田藝衡といった明人の言も引かれており、鍾惺、譚元春の文学観とは相容れないものもある。本書に収められる評は、必ずしも凌濛初の文学観や主張を直接的に反映したものではなく、あくまで編集者、プロデューサーとしての立場から集められたものだと考えるべきであろう。

『二刻拍案驚奇』卷三十七に、「徽州風俗、以商賈爲第一等生業、科第反在次著（徽州の風俗、商賈を以て第一等の生業と爲し、科第は反つて次著に在り）」とあるように、明末には士人と商人の伝統的な境界線が曖昧になり^[19]、馮夢龍や凌濛初のような人物が現れた。凌濛初の出版活動については、表野和江氏等による研究にも詳しいが^[20]、彼の文人としての側面だけでなく、商才にも注目することで、当時の出版をめぐる様々な問題、たとえばどのような読者がどのような書物を求めていたのか、といった問題にもより迫りうるように思われる。今後の課題としたい。

注

[1]拙稿「明代文選関連書籍考」（『中国学研究論集』第四十号 二〇二二）を参照されたい。

[2]郭正域の批評について、『合評選詩』がどのテキストに基づいたのかについては（現存するものなのか否かも含め）定かではないが、ここでは現存する郭正域の批評本である『新刊文選批評』（国立公文書館所蔵）を用いる。

[3]たとえば、『新刊文選批評』卷九の沈約「応詔樂游苑餞呂僧珍詩」（四十葉ウラ）には「何練」という眉批が見られるが、『合評選詩』卷一（二十二葉ウラ）には確認できない。またたとえば『新刊文選批評』卷十の沈約「游沈道士館」（十一葉）には「寧爲二語道破秦王漢武侈心可謂確論」という眉批があるが、『合評選詩』卷二（二十六葉ウラ）は「寧爲」を欠く。圏点については若干の異同が確認でき、たとえば『新刊文選批評』卷九の盧誼「覽古詩」（五十五葉ウラ）の「繆子稱其賢」には抹「一」が付されているが、『合評選詩』卷二（五葉）には見られない、といった具合である。

[4]前稿（凌濛初編『合評選詩』考（一）「附」『合評選詩』序文・凡例・付録翻字稿）、『中国中世文学研究』第七十四号 二〇二二）を参照されたい。

[5]注「一」に同じ。

[6]『文選詩集』については、広島市立中央図書館浅野文庫所蔵のものを調査した。本文の書題は『文選詩集』、封面は『選詩旁註』、凡例および目録は『文選詩集旁註』。

[7]『文選詩集』に見られる「班固」の項が『合評選詩』には

見られず、また「王康瑤」の項の文言が異なるのみである。

[8]たとえば『文選詩集』凡例第十四条には「文選有詩甲詩乙至詩庚之說。今即據此分爲七卷、然詩止于庚意不可曉。」とあるが、『合評選詩』凡例第一条にも「文選本詩甲詩乙至詩庚而止。止于庚意不可曉、殆偶以干紀、卷僅得七而遂止耳。今仍其舊分爲七卷、而去其甲乙之說。」とある。また凡例第十二条には「人人通曉不錄、如盧子諒覽古詩曰趙氏有和璧、此首皆相如完璧返趙事。」とあるが、『合評選詩』凡例第三条にも「註從六臣中取其簡明者、節錄之、取可解而止、不多援。故實句證以爲博至有、雖係往事、人人通曉（如和璧隋珠之類）不錄。」とある。本文の版式についても、両書とも一行十八字となっており（『合評選詩』は一葉十八字八行、『文選詩集』は一葉十八字六行。なお『文選詩集』については本文を六行とし、界線を入れて傍注を付す）、非常に似通っている。

[9]『四庫全書総目提要』（集部四十四、総集類存目一「文選纂註」十二卷）「明張鳳翼撰。鳳翼有『夢占類考』、已著錄。是書雜採諸家詮釋『文選』之說、故曰『纂註』。然所引多不著所出。夫詮釋義理、可以融會羣言、至於考證舊文、豈可不明依據。言各有當、不得以朱子集傳、集註藉口也。其論『神女賦』『王』字譌『玉』、『玉』字譌『王』、蓋採姚寬『西溪叢語』之說、極爲精審。其註無名氏古詩、以「東城高且長」與「燕趙多佳人」分爲兩篇、十九首遂成二十。不知陸機擬作、文義可尋、未免太自用矣。」

[10]『詩品』（中品）も、顔延之を「其源出於陸機」とする。

[11]序文については前稿を参照されたい。「熱精文選理」につい

ては、胡仔『漁隱叢話』巻二、巻九等にも見られる。

[12]たとえば趙俊玲『《文選》評点研究』(上海古籍出版社、二〇一三)は「科挙考試也一定程度推动了士子学习《文選》。明中后期一大批文人倡导『以古文为时文』、不管是七子派、唐宋派、还是公安派都主张通过加强古文的修养来挽救日益靡弱的时文。而且、八股文外、明代还考策、论、表、判等、读《文選》对写作这类文章亦多有裨益。推动了《文選》评点的产生、发展。」とし、王小婷『清代《文選》学研究』(上海古籍出版社、二〇一四)も、「明代『文選』学最主要的特点是以删注、评点类著作为主。为了顺应士子们应试的需要、许多应对八股文的写作范本、读本应运而生。评点是学习诗文最方便的教材。一方面、士子可以边读作品、边参阅评点、加深对作品的理解；另一方面还可以发现问题、引发进一步的思考。而且评点多采用眉批、夹批、文末总批的方式、分布在诗文四周、方便查阅、同时简洁的评语也减少了长篇解释造成的阅读上的不便。」とする。

[13]表野和江「明末呉興凌氏刻書活動考―凌濛初と出版―」(『日本中国学会報』第五〇集 一九九八)は、「閔齊伋が刻したのは、当時坊刻を中心に数多く出版されたことが知られる、経書に対する評点本であった。閔齊伋の刻書が確かに受験生を意識したものであったことは、その最初の套印本『春秋左伝』の凡例に「其の初学の課業、批評を取る無くんば則ち墨本有る在り」と言い、初学者用の評点本は何と言っても套印、と謳っているのにも明らかである。…：経書に注釈を付けてわかりやすく解説した評点本が色分けされて更に見易くなれ

違ないし、また詩の鑑賞と制作に当たっても、各人の好尚の如何はともかくとして、一つの有力な指針ともなり得たことであらう。」と、作詩においても有用であったとする。

[17]たとえば『列朝詩集小伝』(丁集中「鍾提学愷」)には、「所撰『古今詩歸』盛行於世、承學之士、家置一編」とある。

[18]たとえば『文選』の注釈書として位置づけられる『文選纂注』『選詩約注』『文選章句』『文選詩集』『文選刪注』(いずれも万暦年間成立)は、李善注および五臣注、あるいは李善注を抜粋、加筆したもので、六臣注『文選』のダイジェスト版とも言えるものである。そこに評が加えられた『文選纂注』の評点本も、あくまで注がメインである。また、『合評選詩』に基づいたと思われる郭正域本(『新編文選批評』)についても、各詩末に「考注」が置かれ(字句や作品の説明で、六臣注の抜粋)、ダイジェスト版六臣注『文選』を更にコンパクトにし、そこに郭正域の批評を加えた形になっている。これらはたしかに『文選』の入門書として作られたものと考えられる。

[19]余英時「明清変遷時期社会与文化的転変」(『中国歴史転型时期的知識分子』聯経出版事業公司、一九九二)等参照。

[20]注[13]ほか、「呉興凌氏刻『世説新語』四種について」(『日本中国学会報』第五十二集 二〇〇〇)、「鼓吹」考」(『藝文研究』第八〇号 二〇〇一)等がある。

(付記)本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)『《文選》の規範化に関する基礎的研究』(研究課題番号：19

ば、受験生にとって実に便利なこと、今日のカラフルな参考書やラインメーカー等の役割を引合いに出すまでもあるまい。」とする。

[14]本評は、『新編文選批評』(九卷五十九葉ウラ)では題下に引かれる李善注の上欄に置かれる。以下、評の置かれる位置については、体裁のちがいやスペースの関係上、必ずしも底本と同じではない。また、『古詩帰』にも圈点が付けられているが、『合評選詩』はあくまで郭正域の評点に拠っているため、本文に付けられる圈点と、鍾愷、譚元春の評語が矛盾する場合もある。『古詩帰』については、国立公文書館(内閣文庫)所蔵のものを調査に用いた。

[15]鍾愷の本評については、『古詩帰』では第八句の下に置かれていることから『古詩帰』は割り注の形で評語が置かれる、ここでいう「虚字」は「聊自」の「自」を指すものと考えられる。

[16]『詩帰』の評語と小説との類似性については、つとに入矢義高氏が「詩帰について」(『東方学報』第十六号 一九四八)において、「私は、右傍に施された評点と睨み合わせつつ此の評語を読んでゆく時、小説的な興味をさへ感ずるのである。このやうな評詩の方法は、金聖嘆に至って、また特異な展開を示すことになる。」と述べられている。但し、入矢氏は『詩帰』に見られる素朴な印象批評について、「現在の我々からすれば、隔履搔癢の感がせぬでもなく、時には真意を把握しかねることもある。しかし当時の人にとっては、このやうな批評法は、実は極めて示唆に富んだ興味あるものだったに相

H0137)、および基盤研究(C)「中国通俗小説の批評に関する研究」(研究課題番号：20K00370)による研究成果の一部である。

【付表】

以下の表は、『合評選詩』所引の評について、評者および所在を整理したものである。本稿ではハーバード大学燕京図書館蔵『選詩』(HOLLIS number : 99007754100203941 Harvard-Yenching Library Chinese Rare Books Digitization Project-Collected Works)に基づいて調査を行った。なお、ハーバード大学燕京図書館蔵本は巻五の七葉ウラ〜八葉オモテを欠いているため、この部分については『《文選》研究文献輯刊』(国家図書館出版社、二〇一三)第二十八冊を用いた。

評者については、第一巻所収の(三)「批評選詩名公姓氏」(および「註選詩六臣姓氏」)の順に並べた(郭正域を除く)。評の所在については、巻数および葉数を示し、「b」はウラを示す。また第一巻所収の(四)「詩人世次爵里」に見られるものは(爵里)とした。同人の評が連続して引用される場合(「又曰〜」)は、(又)で示した。備考には、依拠したと思われる文献(現時点で確認できた書物、作品)を記した。

巖羽	3-1, 3-13b, 3-17, 4-7, 6-1, 6-1b, 6-7, 7-5b, 7-12, 7-15	『滄浪詩話』 (『詩人玉屑』?)
葛立方	2-2, 2-6, 2-20b, 2-23, 3-9, 3-19, 3-24, 3-26b, 3-28, 3-33, 4-26b, 5-3b, 5-4b, 5-8, 5-35	『韻語陽秋』
范唏文	1-12, 1-13b, 1-13b(又), 1-22b, 3-3b, 3-14, 3-18b, 3-24b, 3-25b, 5-17, 5-25b, 5-26b, 5-27, 6-4b, 6-12, 6-27b, 6-27b, 7-19b, 7-20b	『対床夜語』
羅大経	4-30	『鶴林玉露』
魏慶之	1-4, 3-4, 4-33b, 5-8b, 5-10, 5-11b, 5-15b, 5-19b, 6-1, 6-1b, 6-4, 7-1b, 7-21	『詩人玉屑』
蔡寬夫	6-22b	『蔡寬夫詩話』
蔡敬夫	5-12b	『古詩補』?
祁寬	5-34	
魯郊	6-25	
李東陽	2-18b, 5-34b	『麓堂詩話』
徐棖卿	2-11, 5-7, 5-12, 6-4b, 6-4b, 6-5(又)	『談藝錄』
楊慎	1-25b, 2-7b, 2-14b, 3-2b, 3-8, 3-16b, 3-24b, 4-21b, 4-22, 4-31, 4-36, 4-36, 5-10b, 5-12, 5-14, 5-15, 5-20b, 5-30, 5-35b, 5-35b(又), 6-2b, 6-2b(又), 6-4, 6-5b, 6-5b(又), 6-9, 6-12, 6-13, 6-14b, 6-25b, 6-27, 6-27(又), 6-30b, 7-11b, 7-14b	『丹鉛總錄』 『升庵詩話』
何景明	6-17b	
何良俊	〈爵里〉-8b, 2-11, 3-5, 6-22b	『四友齋叢說』 (6-22bは『四溟詩話』所引『門風新話』?)
王世貞	1-4b, 1-15b, 1-20, 1-21, 2-2, 2-3, 2-9b, 2-12, 2-14, 2-18, 2-19b, 2-19b, 2-21, 3-1, 3-21b, 3-21b(又), 4-6b, 4-7, 4-21b, 5-5, 5-11, 5-12, 5-14b, 5-17, 5-26b, 5-35, 5-35(又), 5-35, 6-1, 6-1, 6-3b, 6-4, 6-4b, 6-6, 6-6b, 6-7b, 6-9, 6-10b, 6-10b, 6-23, 7-16b	『藝苑卮言』
王世懋	3-1, 3-13b	『藝圃雜余』
皇甫汈	1-4, 3-8, 4-22, 5-12b, 7-28b	『角簾新話』
田共衡	〈爵里〉-2, 5-3	『留青日札』
鍾惺	1-5, 1-5(又), 1-5b, 1-5b(又), 1-6, 1-6(又), 1-6(又), 1-6(又), 1-26, 1-26b, 1-26b, 2-2, 2-2, 2-2b, 2-6b, 2-7, 2-7, 2-7b, 2-7b(又), 2-7b, 2-7b(又), 2-7b(又), 2-8, 2-8, 2-8(又), 2-8, 2-8b, 2-8b	『古詩補』

評者	評の所在	備考
沈約	4-30b, 5-1, 6-17b	『宋書』
謝靈運	〈爵里〉-8b	『詩品』
鍾嶸	〈爵里〉-1b, 2, 2b, 3, 3b, 3b, 4(又), 4b(又), 5(又), 5b(又), 6(又), 6b(又), 6b(又), 7b, 7(又), 8(又), 8, 8b, 9(又), 9b(又), 10b(又), 11(又), 12(又), 12(又), 12b(又), 13, 14, 14b, 14b(又), 15, 15b(又), 16b(又), 16b(又), 17(又), 17b, 17b(又), 18(又), 18b(又), 19(又), 19b(又), 20, 2-11b, 2-18b, 5-11b, 5-14b, 6-1, 6-11, 7-5b	『詩品』
劉勰	〈爵里〉-13, 5-35, 6-3, 6-9, 6-17b	『文心雕龍』
駱賓王	5-12, 6-7, 6-9	『和道士閻情詩啓』 (『詩人玉屑』?)
李白	6-18b	「金陵送張十一再游東吳」
王昌齡	2-1, 3-8, 5-8b, 5-9, 6-3b	『詩格』
元稹	6-8	「唐故工部員外郎杜君墓係銘」
柳皎然	2-1b, 2-2b, 2-12b, 2-13, 2-18b, 2-18b(又), 3-8, 3-8b, 4-21b, 4-33b, 5-11b, 6-6, 6-6, 6-11, 7-16b	『詩式』
王安石	6-22b	『遯齋閑覽』 (『茗溪漁隱叢話』?)
蘇軾	6-23, 6-23	「慎改竄」 (『茗溪漁隱叢話』?) 『韻語陽秋』 『詩人玉屑』 『茗溪漁隱叢話』
韓駒	6-23, 7-24	『茗溪漁隱叢話』?
劉辰翁	6-9b	
敖陶孫	〈爵里〉-3, 3b, 14, 14b, 17, 6-20b	『龍翁詩評』 (『詩人玉屑』)
宋祁	2-3b	『詩人玉屑』?
真德秀	2-15b, 5-12b, 5-13b	『文章正宗』
葉夢得	2-18, 3-7, 7-28	『石林詩話』
朱熹	5-12b, 5-12b(又), 5-28, 5-28b	『朱子語類』

黄庭堅	《鶴里》-14	『仕学規範』?
世説	1-25	『文選』李善注(『新刊文選批評』「考注」?)
古今詩話	2-9	『古今詩話』(『仕学規範』?)
張鳳翼	6-4	『文選纂注』
芥隠筆記	6-12	『芥隠筆記』

	, 2-8b, 2-9, 2-9(又), 2-9, 2-9, 2-9(又), 2-9b, 2-9b, 2-13b, 2-13b(又), 2-13b, 2-14, 2-16b, 2-16b(又), 2-16b(又), 2-18, 2-18(又), 2-19, 2-19(又), 2-19(又), 2-19, 2-19b(又), 2-19b, 2-20, 2-21, 2-21b, 2-21b, 2-24, 2-24, 2-26b, 2-26b, 2-26b(又), 2-27(又), 3-1, 3-4, 3-4(又), 3-5, 3-5b(又), 3-5b(又), 3-6b, 3-6b(又), 3-6b, 3-7(又), 3-7b, 3-10, 3-10(又), 3-10b(又), 3-10b, 3-13, 3-13b(又), 3-13b(又), 3-14, 3-14, 3-22, 3-22b, 3-22b, 4-13, 4-14b, 4-16b, 4-16b(又), 4-17, 4-21, 4-21(又), 4-22, 4-22, 4-29, 4-29(又), 5-3, 5-4b, 5-5, 5-8b, 5-10b, 5-10b, 5-12, 5-12b, 5-12b, 5-12b, 5-13b, 5-13b(又), 5-14, 5-14, 5-16, 5-16, 5-16, 5-29b, 5-31, 5-31, 5-34, 5-35, 5-35(又), 5-35, 6-1b, 6-2, 6-2, 6-2b, 6-2b(又), 6-2b, 6-3, 6-3, 6-4, 6-5, 6-5(又), 6-5b, 6-6, 6-6, 6-6b(又), 6-6b, 6-6b(又), 6-7, 6-7b, 6-7b(又), 6-14, 6-19, 6-19(又), 6-19(又), 6-19, 6-23, 6-23b, 6-23b, 6-24(又), 6-24(又), 6-24b, 6-25(又), 6-25b, 6-25b, 6-26, 6-26b, 6-34b, 6-34b, 7-24, 7-24b	
譚元春	1-5b, 1-26, 1-26b, 2-2b, 2-7, 2-7b, 2-7b(又), 2-7b(又), 2-7b, 2-8, 2-8b, 2-9, 2-9, 2-9b, 2-9b(又), 2-13b, 2-14, 2-14(又), 2-14(又), 2-14(又), 2-14(又), 2-18b, 2-19, 2-21, 2-21b, 2-26b, 2-26b, 2-26b, 3-6b, 3-10b, 4-13, 4-13(又), 4-14b, 4-15, 4-32b, 5-11b, 5-12b, 5-14, 5-29b, 5-29b, 5-31, 5-34b, 6-1b, 6-2b, 6-6, 6-6, 6-6b, 6-25, 6-34b, 6-34b(又)	『古詩歸』
六臣		
呂延濟	2-24, 7-17	
劉良	3-1, 3-25, 7-16b, 7-16b, 7-19b, 7-21	
張洸	2-8b, 2-8b, 2-9, 2-22	
李周翰	5-21, 7-17	
呂向	1-8, 2-2, 2-9, 2-11b, 4-2b, 5-36	
李善	1-13, 2-11b, 2-13b, 3-1, 3-7, 3-8, 3-32, 4-25, 4-28, 5-7b, 5-36, 6-4, 6-17, 7-2, 7-16	
その他		
虞九章	1-1, 2-17, 6-10b, 7-21b	『文選詩集』